広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集

上目神谷遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目　　次

1．はじめに ……(1)

2．位置と環境 ……(2)

3．遺構と遺物 ……(5)

4．まとめ ……(12)

挿　図　目　次

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）……(3)
第2図　周辺地形図（1：2,500）……(4)
第3図　遺構配置図（1：200）……(5)
第4図　ＳＤ１実測図（1：80）……(6)
第5図　ＳＤ３実測図（1：40）……(7)
第6図　ＳＢ４実測図（1：60）……(8)
第7図　遺物実測図 (1)（1：3）……(9)
第8図　遺物実測図 (2)（1：3）……(10)
第9図　遺物実測図 (3)（1：2）……(11)

図　版　目　次

図版1　a　遺跡遠景（西より）
　　b　調査風景
図版2　a　ＳＤ１調査状況（北西より）
　　b　ＳＤ１完掘状況（北西より）
図版3　a　ＳＤ３検出状況（南より）
　　b　ＳＤ３遺物出土状態（西より）
図版4　a　ＳＢ４検出状況（西より）
　　b　遺跡完掘全景（西より）
図版5　出土遺物 (1)
図版6　出土遺物 (2)

例　　言

1．本書は昭和59（1984）年10月に実施した広島県山県郡千代田町のほ場整備推進特別事業（高伏谷地区）に係る上白神谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが千代田町と委託契約を結び，実施した。

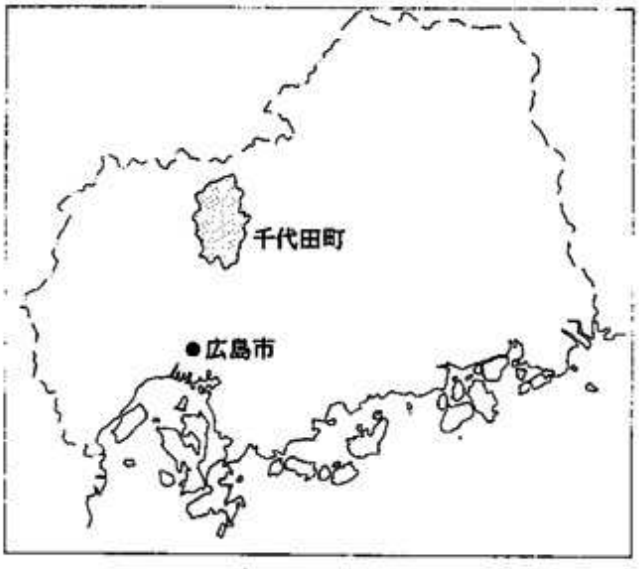
3．出土遺物・遺構に関する資料の整理・実測・写真撮影・整図等は佐々木直彦，山田繁樹が行い，本書の執筆・編集は佐々木が行った。

4．本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

住居跡：SB，溝状遺構：SD，ピット：P

5．第1図周辺遺跡分布図中「6」の移原古墳群は，従来，火神谷古墳群に包括されていたが，水系が異り，地形的に隔絶していることから今後，移原古墳群として別扱いにする。なお，本古墳群は現在3基の横穴式石室墳が確認されている。

6．第1図周辺遺跡分布図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（八重，佐々井）を使用した。



千代田町 位置図

1. はじめに

千代田町は面積171.91km²，人口約10,000人，江の川上流域の中国山地にある小都市である。昭和58（1983）年3月，中国自動車道が町内を通過し，インターチェンジが設けられ，京阪神地域まで3時間の道程となった。また，中国横断道も当町を通ることが決定し，広島市の北隣に位置していることもあり交通体系が一変し，現在県及び町による工業団地造成が進められている。これにより，従来中国山地の町村にみられた過疎化に歯止めがかかり，今後の発展が期待されている。一方では，このような各種開発に伴い多くの遺跡の調査が行われ，町の原始，古代の様相も明らかになりつつある。

このような状況の中で，千代田町は農家の兼業化による人手不足に対応し，農作業の省力化を図るため，作業効率の悪い谷水田のほ場整備推進特別事業（高伏谷地区）を計画した。そのため，千代田町は当該地域における埋蔵文化財の有無について，昭和58（1983）年6月広島県教育委員会（以下「県教委」）あて照会した。これを受け県教委では昭和58（1983）年7月，遺跡分布調査を実施し，試掘調査が必要な旨を回答した。昭和58（1983）年11月，県教委は試掘調査によって上日神谷遺跡を発見し，この取扱いについて千代田町と協議を行ったが，現状保存は困難であることから発掘調査を行い，記録保存を図ることとなった。このため千代田町は昭和59（1984）年2月，発掘調査を財団法人広島県埋蔵文化財調査センターに依頼した。発掘調査は昭和59（1984）年10月1日から10月31日まで実施し，本報告書にその成果をまとめた。本書が，当地域研究の新たな資料として広く活用されれば幸である。

なお，本調査にあたっては千代田町農地整備課，千代田町教育委員会，芸北民俗芸能保存伝承館，及び地元住民の方々の御協力を得た。記して謝意を表したい。

調査風景

2. 位置と環境

上日神谷遺跡は，広島県山県郡千代田町大字川東2425番地に所在する。

千代田町は広島県の北西部，中国山地に囲まれた山あいの町であるが，町の中心部を流れる江の川とその支流によって形成された平野部は比較的広く，山県郡における中心地となっている。市街地である八重及び壬生地区は標高270～280mの高所にあるが，河川に沿う交通路は早くから開け，古くから山陰・山陽を結ぶ交通の要所としての位置を占めている。

町内の遺跡は，現在までのところ約300箇所が確認されている。ここでは千代田町内の弥生時代，古墳時代の主要な遺跡について概観してみよう。

弥生時代では，前期の壺棺，土坑墓から成る集団墓が発見された塚迫遺跡[1]や，前期の集落跡ととらえられている川井遺跡がある。また，本年度調査の歳ノ神遺跡では，山陰との関連が注目される後期の四隅突出型墳墓2基を含む墳墓群（箱式石棺，土坑墓）がみつかっている。これらは,芸北山間地域における弥生文化の流入・展開及び墓制を知る上で貴重な資料である。

古墳時代になると，遺跡数は急激に増加するが，その大部分が古墳である。古墳は主として木棺，箱式石棺，竪穴式石室等を内部主体とするものと，横穴式石室をもつものとに大別される。本年度調査の中出勝負峠第8号・9号古墳は，木棺を直葬したものであるが，殊に第8号古墳は自然の円丘状高まりを利用し削り出した古墳で，組合式木棺内より鏡，鈴，槍，玉等が出土しており，当地域では最も古い古墳の一つとしてとらえられる。箱式石棺を内部主体とするものには国藤古墳，金子第4号古墳[1]，中出勝負峠第5号・6号・7号古墳等があり，いずれも丘陵尾根上に築かれた小古墳である。一方，氏神正田遺跡[2]，川東箱式石棺群，壬生西谷遺跡等は無墳丘の箱式石棺の墳墓群である。これらは須恵器を伴わず，前半期の古墳が多いようである。竪穴式石室を内部主体とするものには古保利第44号古墳[3]，塚迫第1号・2号古墳，金子第2号古墳等が確認されている。町内最大の古保利古墳群（53基）の第44号古墳は，丘陵上の小円墳（径約10m）で，石室内からは挂甲，鉄鏃，馬具が，石室外から須恵器が出土している。当地域において竪穴式石室は，箱式石棺と併在，あるいは後出すると考えられる。一方，横穴式石室を内部主体とする後半期の古墳は，大半が丘陵斜面や谷等に数基ずつまとまって存在しており，有岡谷1号古墳[4]，尾原古墳[5]等の調査例からすると，6世紀後半に普及していることが知られる。時期的にやや下る石塚第2号古墳[6]からは鳥形の装飾須恵器，三ツ塚古墳からは金銅製の雲珠，湯舟谷古墳からは鉄地金張りの雲珠が出土している。

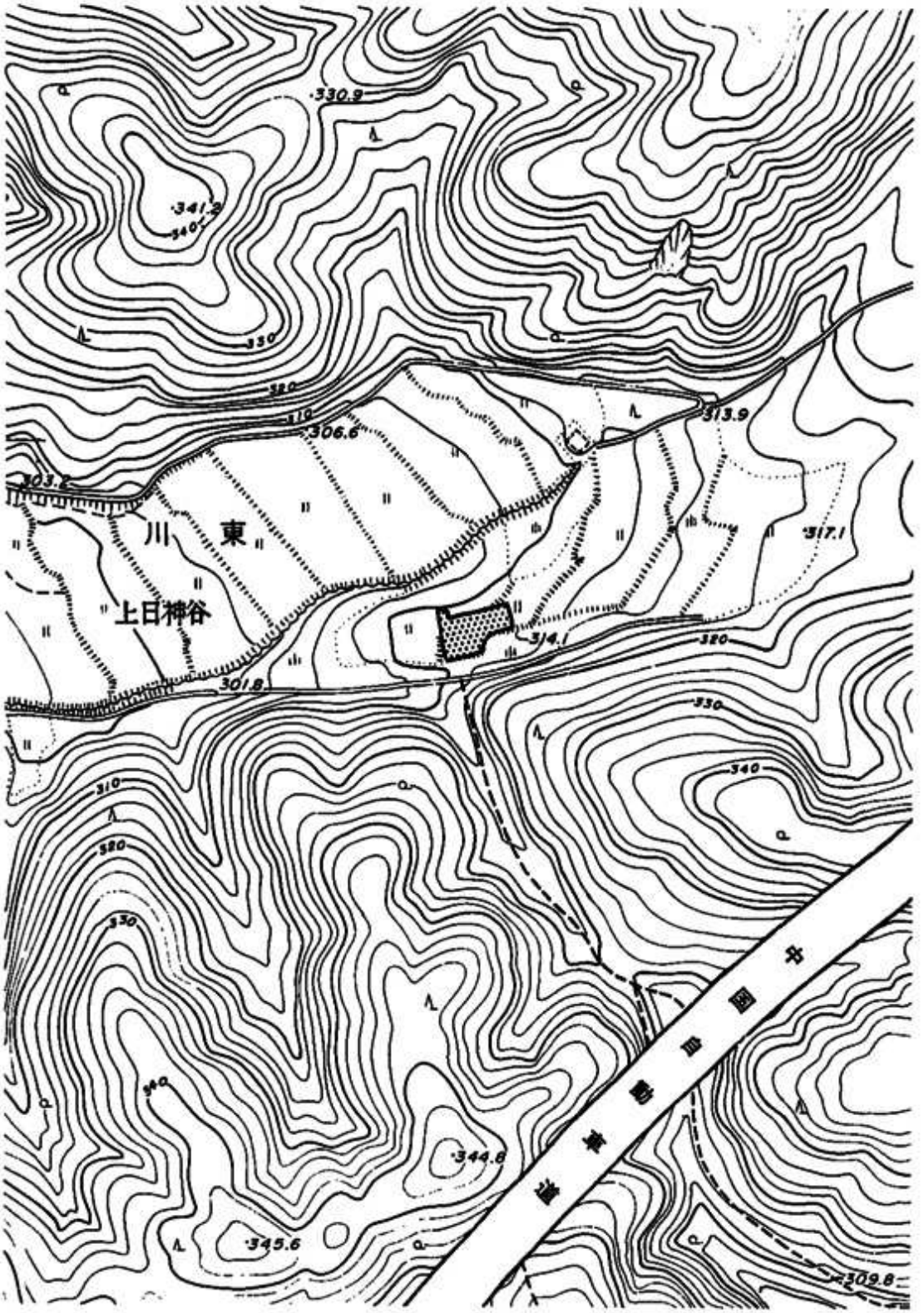
古墳時代の住居跡はこれまでのところ調査例が少なく，本遺跡のほかは城が谷遺跡[4]，青木原遺跡等があるにすぎない。城が谷遺跡では中央に炉をもつ4.9×4.5～4.7mの方形竪穴住居跡1軒が発見されており，古墳時代中期とされている。また，本年度調査の青木原遺跡では円形竪穴住居跡1軒を含む方形竪穴住居跡数軒が発見されている。これらの中には造付けのカマドを備えるものもあり，古墳時代後期と考えられる。

引用・参考文献

(1) 広島県教育委員会「塚迫遺跡群」「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57（1982）年
(2) 千代田町教育委員会『氏神正田遺跡』 昭和59（1984）年
(3) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団『龍岩・古保利・上春木』 昭和51（1976）年
(4) 広島県教育委員会『城が谷遺跡群発掘調査報告』 昭和48年（1973）年
(5) 千代田町教育委員会『尾原古墳発掘調査報告』 昭和53（1978）年
(6) 広島県教育委員会『石塚古墳発掘調査概報』 昭和49（1974）年

A．上日神谷遺跡　1．上の谷東遺跡　2．中嶺山古墳　3．下日神谷古墳
4．牛塚古墳　5．火神谷古墳群　6．移原古墳群　7．氏神正田遺跡
8．段原古墳群　9．火神谷西古墳群　10．下川東古墳群　11．川東箱式石棺群
12．山根遺跡　13．梅木遺跡　14．壬生西谷遺跡　15．背子山古墳群
16．飛石古墳群　17．壬生神社遺跡　18．塚迫遺跡群　19．中出勝負峠古墳群
20．背木原遺跡　21．歳ノ神遺跡　22．大国古墳　23．金子古墳群
24．国藤古墳群　25．古土井古墳　26．巻老温泉裏遺跡　27．一本松古墳群

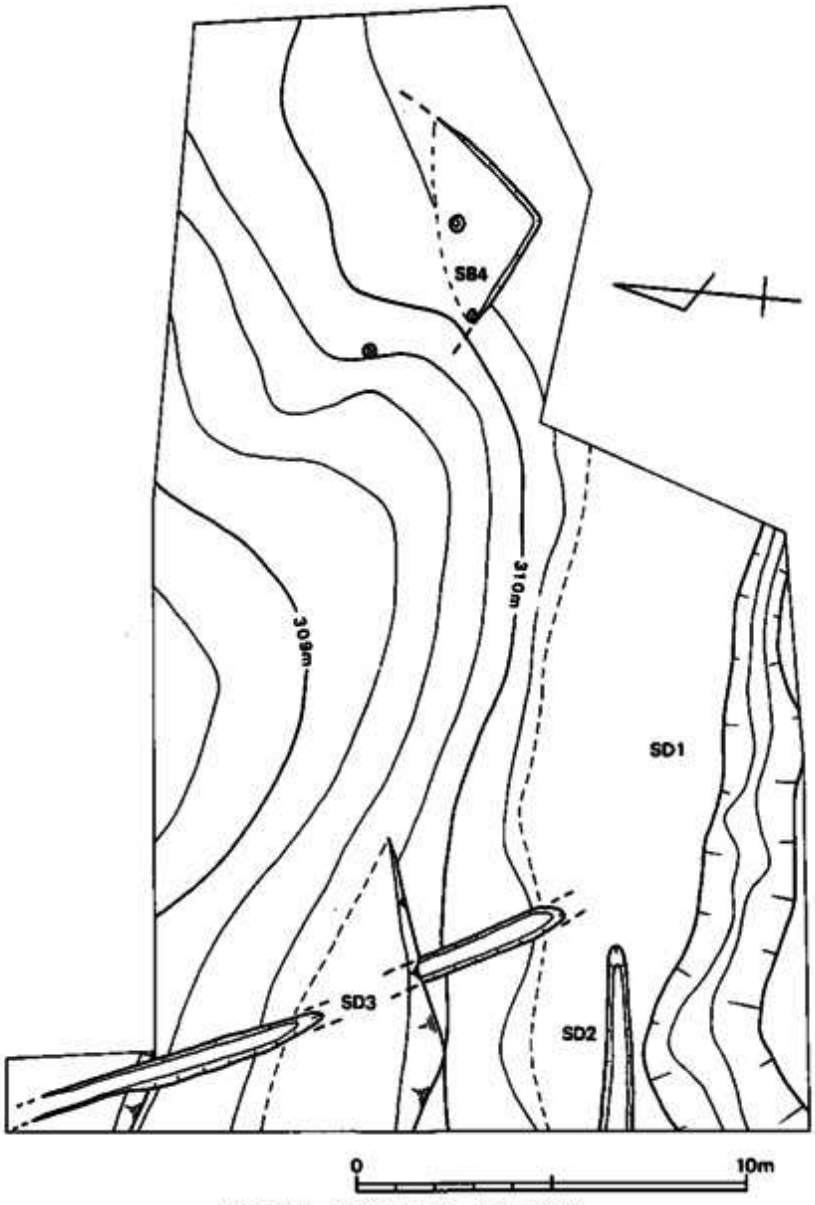
第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000　八重，佐々井）



第2図　周辺地形図（1：2,500）

3. 遺構と遺物

日神谷は千代田町東端に位置している標高587mの火神城山の西南麓に形成された狭長な谷である。上日神谷遺跡は，この日神谷の谷頭付近の南側丘陵裾部，北向きの緩傾斜面に立地しており，現状は水田である。谷面は最奥部まで開墾されて，棚田状の谷水田が続いている。遺跡の標高は約310mである。なお，この日神谷に沿った丘陵裾部や斜面には，横穴式石室を内部主体とする下川東古墳群（2基），火神谷西古墳群（3基），牛塚古墳，火神谷古墳群（10基），下日神谷古墳等，多くの古墳が存在している。日神谷におけるこれらの遺跡の存在は，谷水



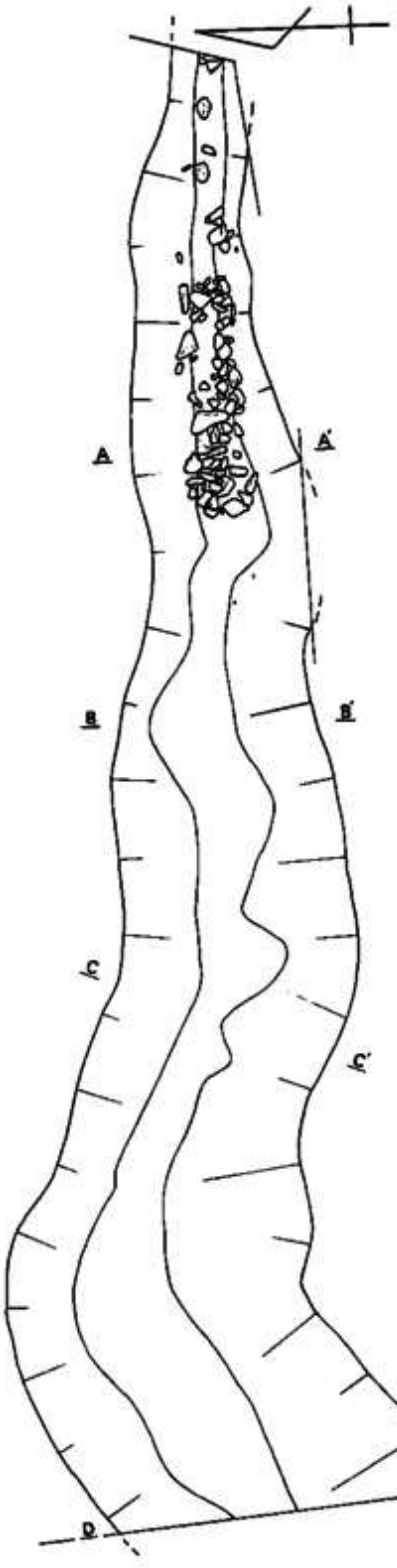
第3図　遺構配置図（1：200）

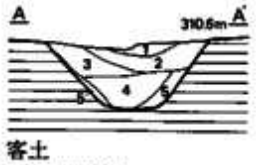
田の経営が比較的早い時期に始まり，安定した生産地であったことを示している。

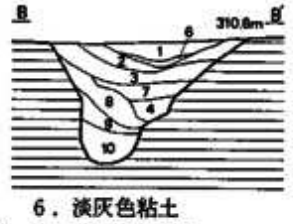
調査は３枚の水田について実施したが，各水田の南半はかなり削平されており，遺構の遺存状態は悪かった。調査区中央部には北から小さな谷が入り込んでおり，0.2～0.4mの黒色土（黒ボク土）が堆積していた。遺跡の基本層序は上から表土層(耕作土層又は客土層)，黒色土層(黒ボク土層)，暗褐色土層(漸移層)，黄色粘質土層，そして花崗岩質の基盤となる。検出した遺構は溝状遺構３本，住居跡状遺構１軒である。調査面積は400m²である。

ＳＤ１（第４図・図版２）

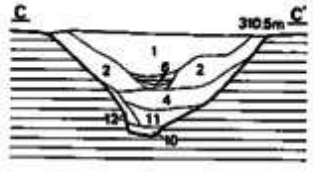
調査区南端を西流する断面形Ｖ字状の溝状遺構である。検出した全長は15.2mであるが，東西両端とも調査区域外へ延びており，全容は不明である。東端で幅1.0m，深さ0.3m，西に向って幅，深さともに増してゆき，西端では幅3.0m，深さ1.2mである。しかし，ＳＤ１周辺は著しく削平されており，当初の規模はさらに大きかったと推測される。東側約3.0mの地点で南方へ蛇行する。

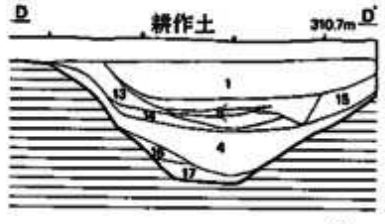






1．客土
2．黒灰色粘質土
3．灰黒色粘質土
4．灰黒色粘質土（黄褐色粘質土混入）
5．暗灰褐色粘質土
6．淡灰色粘土
7．黄褐色粘質土
8．黒色土
9．黄褐色粘質土（黒灰色粘質土混入）
10．黒灰色粘砂
11．黄褐色粘質土（黒灰色砂混入）
12．暗黄褐色粘質土

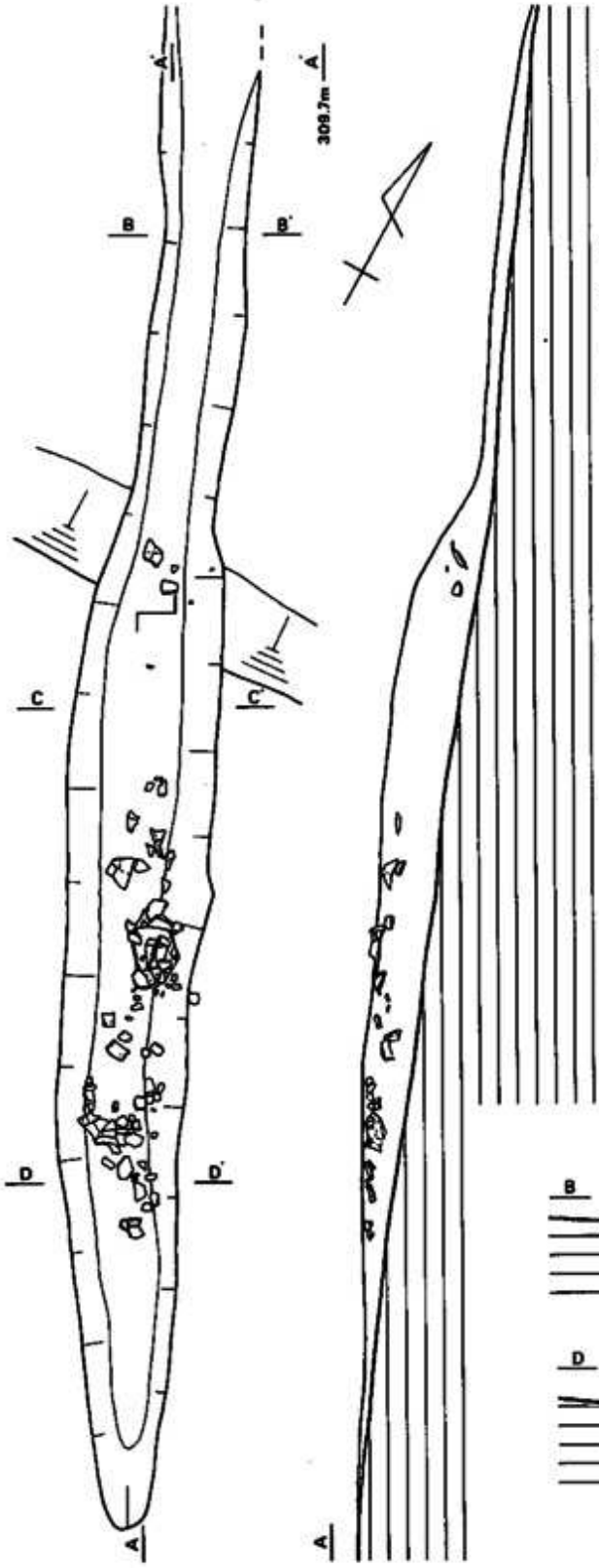




13．黄褐色粘質土
14．灰色粘土
（暗黄褐色砂混入）
15．暗灰色粘土
16．暗灰黄色粘質土
17．灰黄色粘質土

0　2m

第４図　ＳＤ１実測図（１：80）



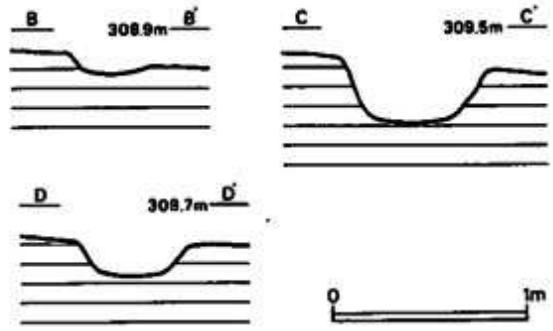
溝底面はすでに基盤に達しているが，流水の侵食により凹凸が著しい。東半部底面には上流からの転石と思われる角礫が集中している。溝下半部は洪水等により一気に埋まっているが(第４層)，その後も水は流れていたようである。そして未だ溝として機能している間に，開墾により埋められたと思われる(第１層)。主に下半部から須恵器片，土師器片，石鏃１点が出土している。

ＳＤ２（第３図）

ＳＤ１に北接する溝状遺構であるが，そのほとんどが削平されており，遺存する深さは５cm内である。埋土は灰褐色粘質土で遺物は伴わない。

ＳＤ３（第５図・図版３）

調査区西半部を谷に向って南流する直線的な溝状遺構である。南端と中央部分は削平され，検出しえた全長は14.7mである。幅0.5～0.8m，深さは最深部で0.4mであり，断面形はU字状を呈する。北端は徐々に深さを減じ，消滅する。溝底面から0.1m～0.2m浮いた状態で土師器甕・甑，須恵器坏身等が一括廃棄された



第５図　ＳＤ３実測図（１：40）

状態で出土した。

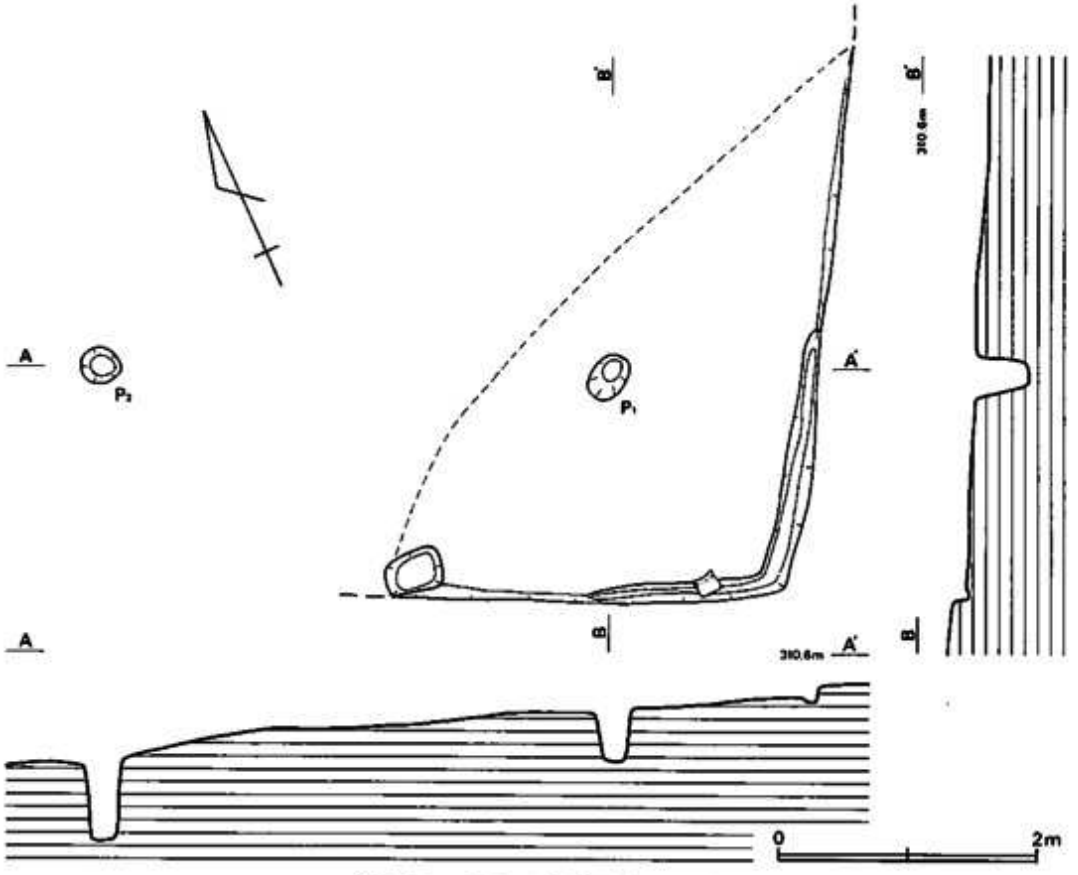
ＳＢ４（第６図・図版４）

調査区東端に位置する方形の住居跡状遺構であるが，東辺・南辺の一部を残すのみで，全体の規模は不明である。残存する壁は東壁が4.4m，南壁が3.0m，コーナー付近には長さ1.6m～2.0m，深さ５cm内外の壁溝を有する。壁高は最も深いコーナー部分で0.15mである。南壁に平行して２つのピットP_1，P_2を検出した。P_1は径0.3m～0.4m，深さ0.4m，P_2は径0.3m，深さ0.6m，心心間距離は4.0mである。P_1・P_2底面のレベル差が0.6mもあること，P_1・P_2に対応するピットがないこと等を考えると，本遺構を住居とするには若干疑問が残る。南壁沿いで床面直上から土師器甕が出土した。

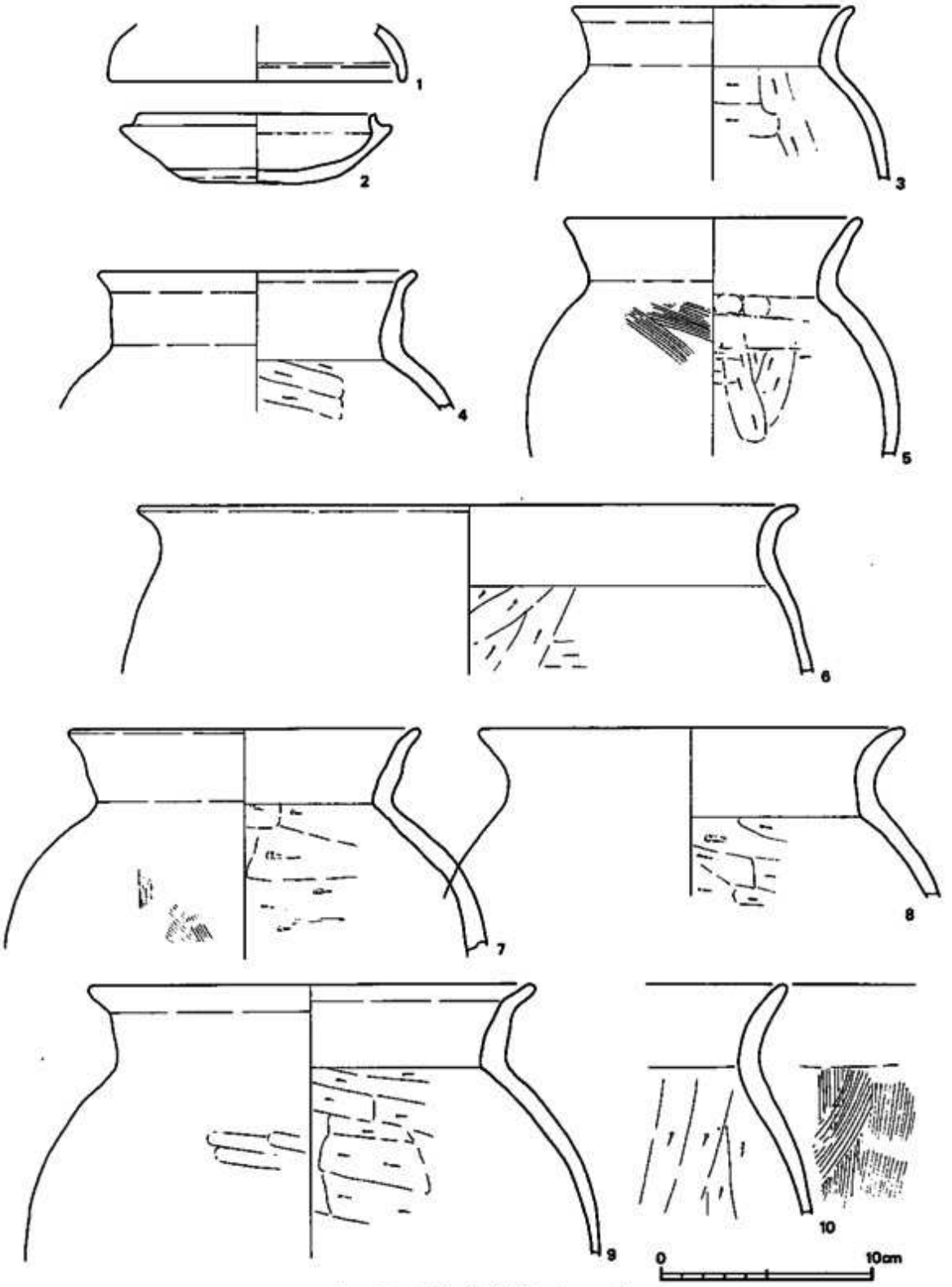
遺物（第７～９図・図版５，６）

須恵器坏蓋・坏身，土師器甕・甑，土製紡錘車，土製小玉，石鏃，黒曜石の剝片が出土した。

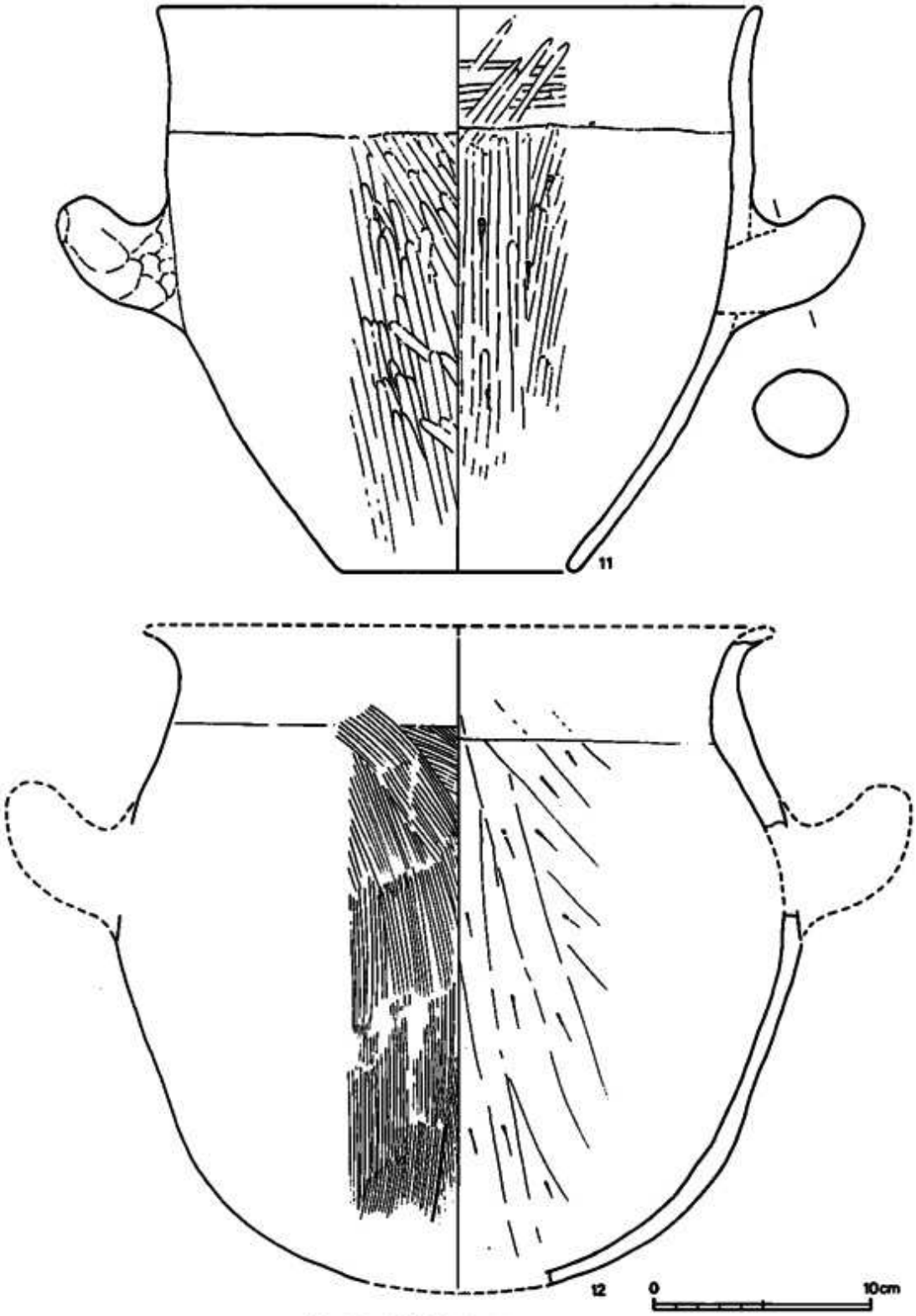
須恵器（１・２）　２はＳＤ３から出土した坏身で，唯一の完形品である。口径11.2cm，器高3.3cmと小形品である。立ちあがりは短く内傾し，受部ともに端部は丸く分厚い。底部は平で浅く，体部は受部まで直線的で大きく外傾する。内面及び外面体部はヨコナデ，底部はヘラ削りである。



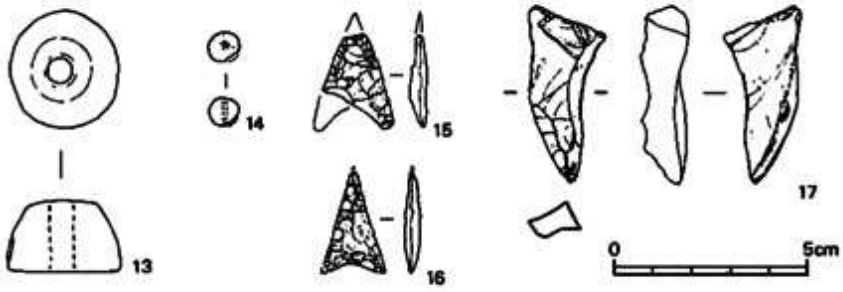
第６図　ＳＢ４実測図（１：60）



第７図　遺物実測図(1)（１：３）



第8図　遺物実測図(2)（1：3）



第９図　遺物実測図(3)（１：２）

土師器（３～12）　３～６，11，12はＳＤ３から，７～10はＳＢ４から出土した。11の甑以外全て甕である。甕はいずれも下半部を欠失しており全容は不明であるが，球状に肩部が張るものＩ（３～５，７～９）と，直線的に垂下するものII（６，10，12）に大別される。

Ｉはさらに口縁部が「く」字状に外反するもの（３・５・８）と，口縁部が頸部状に直線的に上方へ延び，端部直下で短く外方へ屈曲するもの（４・７・９）に細別される。前者は口径13.4～20.0cm，後者は口径15.0～21.2cmで，後者がより大形のものに多いという傾向がある。器面調整は内面がヨコ方向あるいはタテ方向のヘラ削り，外面がタテ方向の刷毛目，口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。また９は外面にヘラナデがみられる。全体的に丁寧なつくりである。

IIは口径が30cm前後と，より大形品である。12は胴上半部に径約４cmの穴があいており，11と同様挿入式の把手がついていたと考えられる。器面調整は内面がタテ方向のヘラ削り，外面がタテ方向の粗い刷毛目，口縁部内外面はヨコナデを施す。

11は口径27.8cm，底径10.0cm，器高26.2cmの甑である。胴上半部は垂直方向に延び，口縁部は若干外反気味におわる。断面が円形を呈する太い把手は挿入式で，胴上半部につく。器面調整は丁寧で，内面はタテ方向のヘラ削りの後，綿密なヘラナデ，外面はタテ方向のヘラナデを施す。口縁部の内外面はヨコナデの後，内面は部分的にヘラナデを施す。

土製紡錘車（13）　断面台形を呈し，片面穿孔である。ＳＢ４の東側から出土した。

土製小玉（14）　径８mmの球形で，片面穿孔である。色調は淡赤褐色を呈する。焼成はあまく，雑なつくりである。表土層中より出土した。

石鏃（15・16）　15はＳＤ３から，16はＳＤ１から出土した。15は長さ2.5cm，幅1.7cmの三角形凹基式の石鏃で，先端部，脚部を欠損している。姫島産黒耀石製である。16は長さ2.7cm，幅1.6cmの三角形凹基式の石鏃で，先端部，脚部を若干欠損している。安山岩製である。

剝片（17）　ＳＤ３より出土した長さ4.6cmの剝片である。両側縁には使用痕様の微小剝離痕がみられる。姫島産黒耀石製である。

4. ま　と　め

以上，上日神谷遺跡について概要を述べてきた。本遺跡は谷水田に面した北向き緩斜面に立地する。遺跡の現状は水田で，開墾によって削平されており，旧地形及び遺構はかなり損われている。このため発掘調査の範囲は限られたものとなった。遺構は溝状遺構３本，住居跡状遺構１軒を検出したが，このうち遺構として明確なものはＳＤ３とＳＢ４である。このため遺跡の性格を詳細に知ることは困難である。

ＳＤ３，ＳＢ４は，それぞれの出土土器が接合していることから，ほぼ同時期と考えられる。さらに，ＳＤ３の遺物が溝底面から0.2m前後浮いた状態で出土しており，ＳＤ３が半ば埋没した段階で土器が投棄されたことが知られる。また，両遺溝は浅い谷状の地形をはさんで約20mの距離にあり，この空間は当時何らかの有機的な役割を果した広がりであったと推測される。

ＳＤ１は埋土の堆積状況からみて水路であることを確認したが，蛇行する流路は人工のものではなく，自然の小河川（小川）と推測される。水田開墾によって整地されるまでは機能していたようであるが，その上限については不明である。

これらの遺構がいかに機能していたかは不明であるが，日常の調理用具である土師器甕・甑が多く出土しており，本遺跡が集落の一部であったことがうかがえる。そして，この集落は本遺跡から南側の丘陵部にかけて存在したと考えられる。

遺物は主にＳＤ３から出土したが，その出土状態から一時期に投棄された一括遺物としてとらえうる。器種は土師器甕が大半を占める。甕口縁部は「く」字状を呈しているが，端部直下で大きく外方へ屈曲させており，これは本遺跡出土遺物の大きな特徴といえる。また，12は把手付の甕と思われるが，県内での出土例は比較的少い。三次市松ヶ迫遺跡群では数点出土しており，６世紀末から７世紀前半頃とされている。土師器の編年に関しては，周辺地域では当該期の良好な資料がなく，対比することは困難であるが，伴出の須恵器である2についてみると，全体的に小形化してきていること、立ちあがりが分厚く短いことなどから６世紀末から７世紀初頭に位置づけられ，これを以って本土器群の年代としたい。

以上，本遺跡は古墳時代後期に営まれた集落の一部であることを確認した。日神谷沿いの丘陵上や斜面には横穴式石室を有する古墳が数多く築かれており，このような狭長な谷の最奥部までさかんに開かれたことがうかがえる。今後，このような集落，経済基盤としての水田，古墳，これらの有機的なつながりを総合的に解明していく必要があろう。今回の調査は遺構に関しては貧弱であったが，土器についてみれば当該期の土師器が稀少であるだけに，基本的な一括資料として当地域における土器編年に大きな役割りを果すものと思われる。今後，ほ場整備が進むにつれ，このような集落跡の発見も増えることが予想される。

図版 1

a　遺跡遠景（西より）

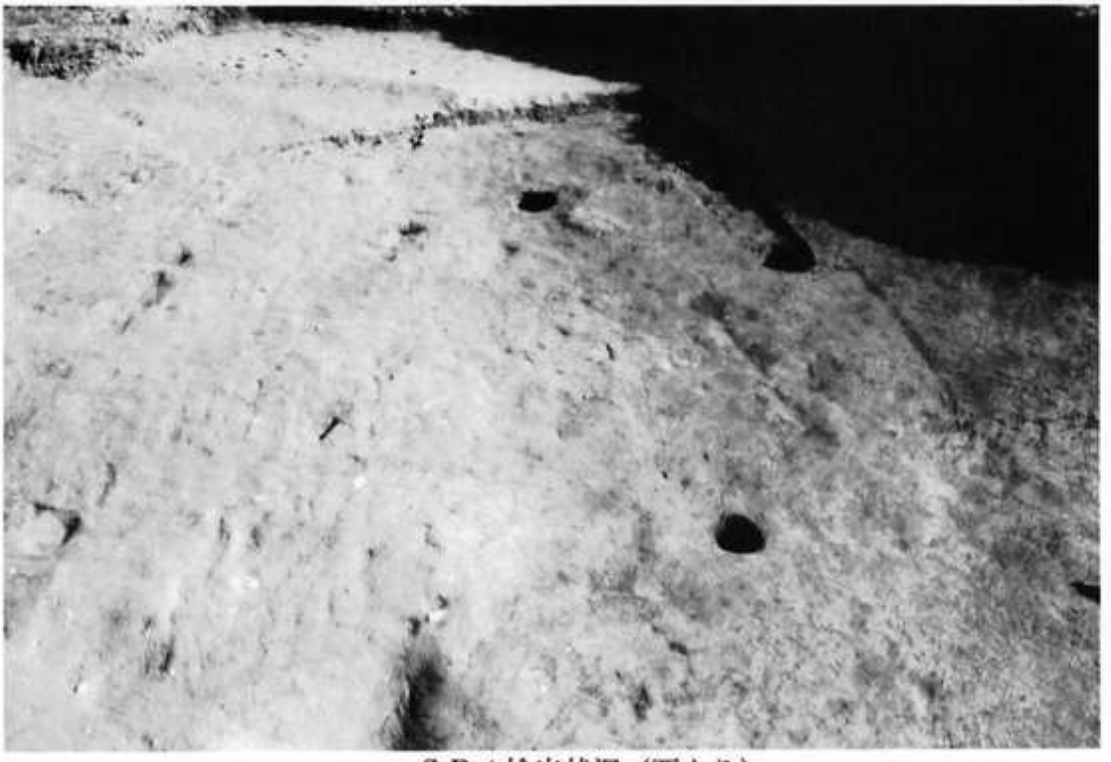
b　調査風景

a　ＳＤ１調査状況（北西より）

b　ＳＤ１完掘状況（北西より）

a　ＳＤ３検出状況（南より）

b　ＳＤ３遺物出土状態（西より）



a　ＳＢ４検出状況（西より）

b　遺跡完掘全景（西より）

出土遺物(1)

出土遺物(2)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集

上日神谷遺跡発掘調査報告書

発行日
昭和60(1985)年3月31日

編集・発行
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
734 広島市西区観音新町4丁目8-49
TEL(082)295-5751

印刷所
中本総合印刷株式会社